

散文

せんぐう館

開館満 5 周年

執筆者 せんぐう館 学芸員 深田一郎

1

はじめに～式年遷宮が伝えてきたこと

1.1 せんぐう館とは

伊勢神宮は正式には「神宮」といい、天照大神(あまてらすおおみかみ)をお祀りする皇大神宮(内宮)と豊受大神(とようけのおおみかみ)をお祀りする豊受大神宮(外宮)の2つの正宮を中心に125の宮社からなります。毎年1,500回を超える祭典が行われ、天照大神の広大無辺なご神徳を讃え、限りない神恩に感謝して国家の隆昌・五穀の豊穰・国民の幸福を日々お祈りしています。

当館は伊勢神宮の式年遷宮(しきねんせんぐう)を紹介する博物館として平成24年(2012)4月7日に開館しました。式年遷宮とは20年に一度社殿を新造し御装束神宝(おんしょうぞくしんぼう)を新調して大神にお遷りいただくわが国最大のお祭りです。持統天皇4年(690)に始められてから1300年続いており平成25年(2013)には62回目の遷宮が行われました。

当館では式年遷宮を含む伊勢神宮で行われる祭祀を紹介するパネル、大神をお祀りする外宮正殿の側面部分を再現した原寸大模型、社殿の装飾品や大神の御用に供する品々である御装束神宝の製作工程資料などを展示しています。式年遷宮を通じて伝えられてきた日本の伝統的精神文化を次代に継承することを目的としています。



せんぐう館全景

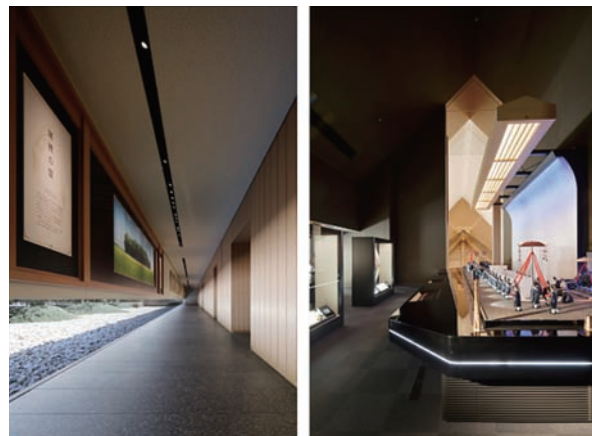


せんぐう館正面

1.2 せんぐう館の建物

当館の設計者は建築家の栗生明氏です。その設計概念は「神の座という神聖な環境の中に新しく参入する建築はどうあるべきか」を考え、「あたかも古代からそこに建ち続けていたと感じさせるほどに神域の景観に溶け込ませること」です。本館(資料館)の屋根勾配は45度傾斜を持つ「矩勾配(かねこうばい)」であり、大神をお祀りする正殿の姿形に倣っています。併設する休憩所は傾斜の緩やかな「緩勾配(かんこうばい)」で、神域の五丈殿(ごじょうでん)・九丈殿(くじょうでん)の勾配と同じです。つまり当館の外観は設計概念に基づき神宮の殿舎と同じ正副の関係性を意図していることがわかります。また屋根はわが国特有のたたら製鉄との連想から鉄材で葺くことを決め、継ぎ目なしでは世界最長(当時)となる11.4メートルの鋳鉄製材を用いています。施工に際しては、山田工作場で匠たちが神恵に適うように造作するという仕事ぶりに倣い、より丁寧な作業と仕上げを心掛けたそうです。

建物の内部空間は二重の入れ子構造にしていることに特徴があります。展示室やケースを一直線に並べて配置し、導線を徐々に奥へと進める変わった構成です。これは正宮の社殿配置に見られる重畳的空間を体感できるように意図したものであり、栗生氏はその着想を「参拝をした時に受けた感動である」と述べています。



長い導線が特徴の北廻廊と展示室4

1.3 せんぐう館の周辺環境

当館は伊勢神宮の外宮の神域内、明治時代に整備された勾玉池(まがたまいけ)の畔にあります。お伊勢参りは昔から外宮から内宮へ進むことが慣わしとされており、当館は参拝の導入部にあたる場所に位置します。お参りをより有意義なものとしていただくきっかけを創りたいという意図を明らかにしています。

参拝者のための休憩所は、緑豊かな木々のたたずまいの中で心身ともに安らかに過ごせる空間となっています。



勾玉池の花菖蒲

勾玉池では初夏にはカキツバタや花菖蒲が咲き、冬には渡り鳥が飛来するなど四季折々の姿を見る事ができます。また奉納舞台では、中秋の名月を愛で、全国から応募のあった短歌と俳句の秀作を、神宮の楽師が古式により披露する神宮観月会を始め、伊勢商工会議所により地元の方々の協力を得て伝統芸能や武道が奉納され、神前に奉る多様な表現をどなたでもご覧いただけます。

こうした当館の事業は周辺地域の活性化にも繋がっています。外宮が御鎮座する山田の町は、古くからお伊勢参りの玄関口として栄えていました。しかし近年は参拝者の移動手段が多様化し、かつての勢いを失っていました。式年遷宮を契機に、多くの方々に気持ちよく参拝してもらえるような町づくりをしたいとの気運が高まり、呼応するかのように当館が設立されて地域と連携した事業が行われるようになりました。このため伊勢市駅と外宮を結ぶ参道では以前に増して参拝者の姿が見られるようになっています。



休憩所



神宮観月会

2 展示の紹介

2.1 シンボル展示 ＜御扉の展示とせんぐうシアター＞

エントランス正面には大きな扉が展示されています。昭和28年(1953)の第59回式年遷宮で調進され、20年間実際に使用された外宮正殿の御扉です。樹齢400年以上の檜(ひのき)の一枚板で作られています。ケースには御扉を固めるための御鎖(みじょう)など鍵の一式も展示しています。檜は日本人が古くから使ってきた木材であること、扉の大きさは伊勢神宮の建物の大きさを想像することができるなど、当館の内容を象徴する導入展示としてご覧いただいています。

せんぐうシアターでは伊勢神宮や式年遷宮を紹介する番組をハイビジョン映像で上映しています。内容は、伊勢神宮で毎日そして毎年行われている祭祀のこと、式年遷宮の概要やこれに関わる建築や工芸の製作技術のこ

と、日本の国土で育まれる豊かな恵みのことなど多岐にわたります。季節ごとに内容を入れ替えており、印象に残る美しい映像から館内の展示の理解をより深めることができます。



エントランスに展示している御扉



せんぐうシアター

2.2 展示室1〈瑞穂の国〉

最初の展示室では、伊勢神宮で行われている日々の営みをご理解いただくため、外宮の祭典を紹介しています。



抜穂と火鑽具（展示室1）

外宮では毎日朝と夕に、大神に神饌をお供えし、国民の平安を祈る「日別朝夕大御饌祭（ひごとあさゆうおおみけさい）」が行われています。一年を通して大神に豊かな稔りを祈り、いただいたお恵みに感謝を申し上げます。神饌はお米をはじめとして酒・水・塩・鯉に四季の野菜や魚介類であり、ここでは大神にお供えされる神饌の模型と、それを自給自足で生産する「御料地（ごりょうち）」、さらには調理に必要な清浄な火「忌火（いみび）」を起こす「火鑽（ひきり）」についても紹介しています。



日別朝夕大御饌祭（参進）

『日本書紀』などにはわが国のことを「豊葦原瑞穂国（とよあしはらのみずほのくに）」と称し、瑞々しく美しい稲穂が実り栄える国であると伝えています。稲は命の糧であり、稲作は文化の礎をなすものです。そして稲作の始まりは神々の時代、天照大神が皇孫・瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）に授けられた「斎庭の稲穂（ゆにわのいなほ）」までさかのぼります。伊勢神宮の最も重要な祭典は秋に斎行される神嘗祭（かんなめさい）です。その年の新穀に感謝の祈りを込めて大神に捧げ、天皇陛下のお供えを奉る祭典です。伊勢神宮は天皇陛下の深い思召しの下で祭祀を行う場所であり、稲作を主とするわが国の伝統的な営み、匠たちの智恵と技、豊かな国土の恵みを祭祀と共に今日まで伝え続けている場所だと認めることができます。



神宮神田



『斎庭の稲穂』今野可啓（神宮徴古館農業館蔵）

2.3 展示室2〈神宮式年遷宮〉

伊勢神宮は、次回の式年遷宮が行われるまでの20年間に様々な営みと準備をします。大別すると次の3つに集約されます。

「神々の新宮を建てること」

「神々に捧げる品々を作り納めること」

「神々に新宮にお遷りを願い、限りない神恩に感謝の祈りをささげる祭典をすること」

式年遷宮の準備は、天皇陛下の思召しのもと開始されます。「神宮式年造宮庁（じんぐうしきねんぞうえいちょう）」

う)」という組織を作ることから始められます。山から木をいただく時、社殿を建てる場所で工事の無事を祈る時、柱を立てて棟木を掲げる時、屋根に萱を葺く時、鋳金物(かざりかなもの)を取り付ける時、御扉を付ける時など、造営の大きな節目に祭典が行われます。



御仙始祭



立柱祭

この間に伊勢の人々は御造営用材を神域に運び納める御木曳行事(おきひきぎょうじ)を行います。地域ごとに分担して、内宮は五十鈴川を遡上する川曳(かわびき)、外宮は宮川から奉曳車で運ぶ陸曳(おかびき)で納めます。「エンヤー」のかけ声や木遣り歌で皆を鼓舞し、力を合わせて運ぶ勇壮な姿からは、みずからを神領民と呼び、神宮に関わることに誇りを持つ伊勢の人々の心意気が強く感じられます。

そして新宮を洗い清め、御装束神宝と祭典奉仕する神職を祓い清めて全ての準備が整うと、天皇陛下がお定め



御木曳行事(川曳)



御木曳行事(陸曳)

になった日時に遷御(せんぎょ)が執り行われます。宮域の灯りが消された浄間(じょうあん)の中、大神が正宮から新宮にお遷りになられます。その翌日には天皇陛下がお供えする「幣帛(へいはく)」を神前に奉り、いつまでも変わらぬ繁栄と幸福の祈りを捧げて式年遷宮は区切りとなります。

なお神様を奉戴して神職が歩む様を渡御御列(とぎょれつ)と申し、展示室4には1/6スケールで再現した模型があります。奉仕員の表情や所作、捧げ持っている御装束神宝の意匠が分かるように細かく造形しており、映像や音声など臨場感ある演出が加えられていることから、奉拝する事が適わない厳かな祭典の様子を実感することができます。



川原大祓(外宮)



遷御(内宮)



渡御御列模型

2.4 展示室3・4 ＜永遠の匠たち—御装束神宝の調製＞

御装束神宝(おんしょうぞくしんぼう)は神様に捧げる品々のことで、紡織具・武具・馬具・楽器・文具など御祭神の御用に供する品々や殿内の舗設品・服飾品・遷御に用いる威儀具(いぎぐ)のことです。その総数は714種類1,576点あり、すべて20年に一度新しく調製されます。調製とは求めに応じて作り上げることを意味する言葉であり、匠たちがわが国で古くから用いられている素材をもとに最高の技を使って神様のために作り上げてきました。こうした匠たちを調製者と呼び、今回の式年遷宮では当代を代表する全国の美術・工芸家や職人たちおよそ2,000人が携わりました。

御装束神宝は天皇陛下にご覧いただいた後、遷御の際に神職が捧持して神前に奉ります。前の御装束神宝はお下げされた後、かつては人手に渡ることは恐れ多いとされ焼却や土中に埋めるなどして遺すことはありませんでした。現在は、式年遷宮の意義を広く知っていただくことと技術の伝承を目的として大半が保存され、その一部を神宮徴古館で展示しています。御装束神宝は国宝や重要文化財に指定される古くからの伝世品ではないものの、古代日本の様式美を今に伝えていることが大きな特徴です。

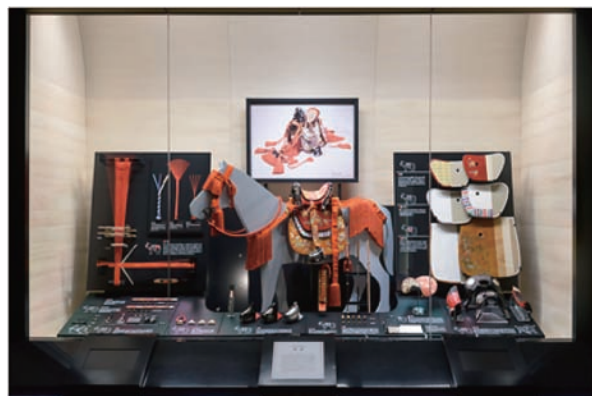


神宝調製の技

当館の展示資料は御装束神宝の調製工程を伝える品々であり、いずれも同じ素材を用いて調製者自身が同じ技術を駆使して忠実に再現しています。その目的は、次世代の技術者たちに古くから受け継がれてきた技術を伝えること、そして神々に捧げるという日本人のもの作り

に対する心構えといった精神性を感じていただくことです。展示室3では多様な工芸技術を総合的に用いて調製される刀剣や木彫の馬、馬具を展示しています。展示室4は武具・装身具・服飾などを展示して、金工・木工・漆芸・染織の各技術に焦点を当ててより詳しく紹介しています。また各ケースには調製者の卓越した技を伝える映像資料を添えています。

御装束神宝に見られる妙なる色の調和、輝き、美しい姿形は、日本の国土の美しさそのものと言えます。多くの恵みから神様の御用を務める品々が生みだされるまでの「技」と、いつの世も変わらぬ崇高な理想の形を求めて一筋に取り組む匠たちの「心」。わが国の工芸美を認識し、それを産み出す技術の奥深さとともに、現在の「もの作り」にも繋がる絶え間ない人々の営みに気づいていただける展示を心掛けています。



御鞍(展示室3)



轡轡宮(展示室4)

※いずれも時期により展示替あり

2.5 展示室5・6 ＜永遠の匠たち—社殿の造営＞

展示室5と6では、社殿の造営にまつわる伊勢神宮の建築様式、造営に用いる御用材、宮大工が木材加工に使う道具類などを紹介しています。式年遷宮の造営では、現在のお宮の隣にある同じ広さの御敷地に新しく社殿を建てて、神様にお遷りいただいた後にこれまでのお宮を解体し、その20年後には空いた御敷地で同様に新しいお宮を建てるという造作が交互に繰り返されます。造営工事

は約8年をかけて行われ、宮大工等のべ15万人の人々が携わります。式年遷宮によって、内宮と外宮の両正宮と14の別宮が新しくなります。造営は、木工事、萱葺工事、金物の調製工事を基本としており、その多くは外宮に隣接する山田工作場で行われています。



内宮正宮（平成25年撮影）

最初に展示している資料は外宮殿舎の配置模型です。皆様が参拝される正宮の敷地内にある社殿や立木の配置をそのままに、1/20に縮尺して再現しています。この模型では私たちが立ち入ることが出来ない祭場の様子を詳細に知ることができます。平成5年(1993)の造営に携わった棟梁が実際の社殿と同じ素材を使い同じ組み方で作り上げました。



外宮殿舎配置模型

木工事では、材となる木の特質を読み取り、鑿(のみ)や鉋(かんな)などの道具を使って木を削り出し、切り組んでいくための様々な経験と技が重要です。中でも継手(つぎて)・仕口(しぐち)という複雑な接合部分は、幾何学の理論に基づいて正しく線を引き出す知恵が伝えられています。これを規矩術(きくじゅつ)といい、わが国で独特の発展を遂げてきました。展示室6では小工(こたくみ)と呼ばれる伊勢神宮の宮大工が実際に使った道具や木工事の工程見本などで伝統の木材加工技術を詳細に紹介しています。



小工の技（展示室6）



小工の技

他にも、萱葺工事では素材のススキを丹念に選別・加工して屋根を葺いていくための道具や技、金物の工事では古くから伝えられているメッキ技法である金鍍金(きんときん)という方法と精緻な文様を仕上げる彫金の技を紹介しています。



道具類の展示と多様な匠たちの技の紹介（展示室6）

外宮正殿の原寸大模型は来館者の関心が最も高い資料です。東側面の1/4部分を再現しています。建材は全て檜を使い、表面には何も塗らない素木造(しらぎづくり)です。また屋根材は萱です。萱は屋根を葺くために用いる草を広くとらえた言葉であり、神宮では昔から材料にススキを使っています。多彩な金物は銅を下地として金鍍金をしたものであり「金銅鍍金物(こんどうのかざりかなもの)」といいます。

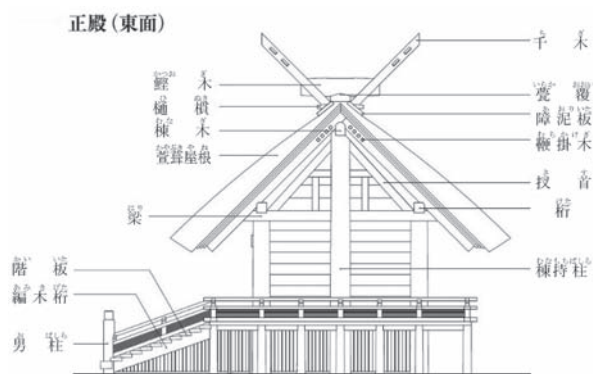
伊勢神宮の建築様式は「神明造(しんめいづくり)」といいます。神社建築は日本で独自の発展を遂げた木造建築であり、神明造はその最も古い姿を今に伝えています。その起源は穀物を蓄えるための倉として用いられた高床倉庫であると考えられています。この模型は実際の正殿

と同じ素材を使い、今回の造営工事に携わった小工が作り上げました。神明造の詳細な構造を間近で確認することができる貴重な資料です。



外宮正殿の原寸大模型

建物の長辺側を「平」短辺側を「妻」といい、神明造は平側が正面になります。屋根の形状は頂点から地上に向かって2つの傾斜面が本を伏せたように山形をしており、これを切妻(きりつま)といいます。模型の中央には太くて長い柱が通っており、これを棟持柱(むなもちばしら)といいます。屋根を突き抜けできた装飾を千木(ちぎ)といいます。屋根に載る丸太状の部材である鯉木(かつおぎ)とともにこれも神明造の特徴です。全ての柱は地面に穴を掘り、土を突き固めてから立てる掘立であること、また湿気対策の工夫として床を地面から離しているなど、わが国の風土に適した姿を留めていることが分かります。



神明造の構造(側面)

檜はわが国固有種の樹木です。加工しやすいこと、比重が大きい上に緻密で狂いが少ないことから、上質な建築木材として用いられてきました。御造営用材で使う檜は伊勢から200キロメートル北東にある木曾地域で産出したものです。一方、伊勢神宮には「宮域林(きゅういきりん)」と呼ばれる森があり、内宮を流れる五十鈴川の川上にある緑豊かな山にあります。清らかな水の源でもあるため、自然林はそのままにして森の保全に努めています。同時に檜を計画的に植林して、将来は造営の用材を全てまかなうためにも育まれています。今回の式年遷宮

では宮域林で間伐した檜も使われました。

素材をいただく健やかな国土、守り育む技を伝える人々、恵みに感謝の心を捧げる営みが揃っていてこそ、伝統は継承されていきます。神宮の森は、豊かな恵みと環境が約束される理想の姿であり、私たちの祖先が営んでいた「始まりの姿」でもあります。



宮域林



神宮職員により檜の苗木を毎年植えている

2.7 展示室7・8 ＜情報検索コーナー・企画展示＞

展示室7には神域の豊かな自然環境を眺めながらくつろげる休憩施設を備えています。書架には神宮に関する書籍を揃え、テーブルには情報端末を設置して、四季の景観を楽しみつつ学ぶことができます。

展示室8では様々な企画展示を開催しています。神道祭祀の根幹ともいわれる神宮の祭儀については、当館の主要テーマである式年遷宮はもとより外宮で行われる恒例の祭典をパネルや文献資料で解説しました。また職員が域内を案内しながら執り行われる儀式を奉拝するガイ



情報検索コーナー(展示室7)

ドをしています。一方、ご家庭で行われているお祀りに関しても、神宮から地域の神社を通じて皆様にお頒ちしている神札「神宮大麻」について、職員が経験を交えながらその由緒や奉製の様子を紹介。さらに神札の素材である伊勢和紙や麻を使った工作を親子で体験できる講座を開催しています。

式年遷宮に関わる民俗文化や社会経済の歴史については、神領民が新宮の御敷地に白色の敷石を奉献する「御白石持行事」や、社殿造営・御装束神宝の調製に必



伊勢神宮の神札についての講座

要な素材である「萱」や「麻」に注目してその技を取り上げました。また歴代天皇が神宮に勅使を差遣して国家国民の平安の祈りを捧げてきた一方で、近世に興った「お蔭参り」のように大勢の人々が何を求めてどの様な手段で伊勢をめざしたのか、神宮徴古館や神宮文庫が所蔵する文化財を展示・解説しながら考察しました。

この様に企画展示では、式年遷宮から派生する様々なテーマをもとに、伊勢神宮と式年遷宮、神道について常設展示を補う親しみやすい内容となっています。



【遷宮】と【技】をテーマにした企画展示
「なつそひく-麻-」（※現在は終了）

3 おわりに～せんぐう館が伝えること

当館では外宮正殿の原寸大模型の前で毎日6回の展示ガイドを実施しています。式年遷宮の祭典や歴史の紹介、模型と建物の構造の解説、伊勢神宮について10～15分程度の時間で話しています。職員から直接話を聞ける機会であるため、連日大勢の来館者が参加しています。また館内を巡るツアーガイドも毎日2回実施しています。博物館のガイドは今日珍しいことではありませんが、当館ではなぜ人々は伊勢に誘われるのか、なぜ式年遷宮が続けられてきたのか、参拝された方々がこうした素朴な問いを持たれた時、職員自らの経験や知識をもとにその答えを見つける手ほどきとなるようなガイドをしたいと考えています。

当館の展示にある神々に捧げる崇高な精神によって磨き鍛えられた繊細で高度な技の数々を間近にご覧いただければ、先人たちが伝えてきた日本の心を再発見することができるかも知れません。その関心が「きっかけ」となり伊勢神宮にお参りをした良かったと思っただけの事を目標に、繰り返されている式年遷宮を将来に伝えるための活動をこれからも続けて参ります。

参考文献

栗生明「せんぐう館の設計にかかわって」（『瑞垣』第223号 神宮司庁広報課 平成24年）